

静岡県で活躍する医師

2,000件を超える症例数 世界で活躍する整形外科医

総合病院 聖隷浜松病院（整形外科部長兼せぼね骨腫瘍センター長）

佐々木 寛二 先生

Dr. Kanji Sasaki



静岡県浜松市に位置する総合病院 聖隷浜松病院は、国内でも有数の診療規模を誇る。また、母体となる社会福祉法人聖隷福祉事業団は、医療・介護を含めて全国的に展開しておりグループ全体の従業員数は約 10,000 名にもものぼる。

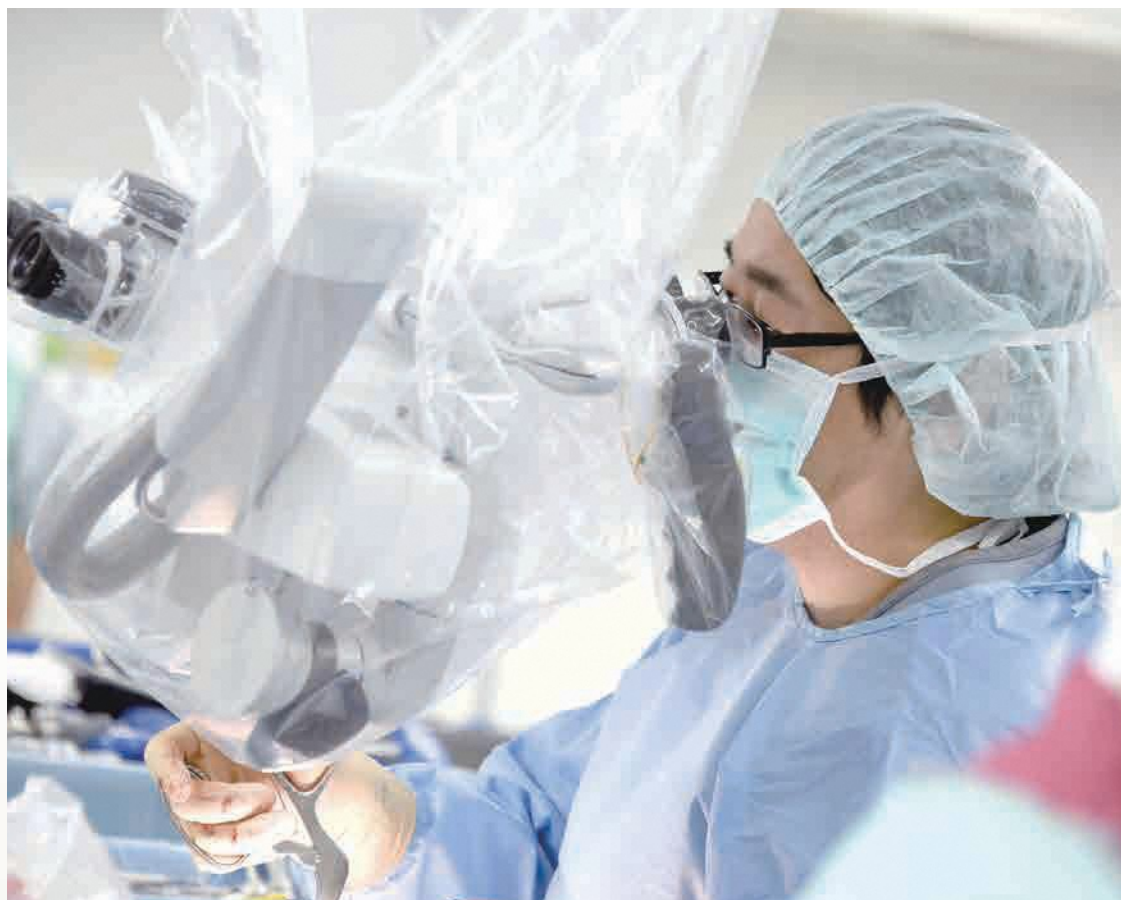
その中核ともいえる同院の細分化された各診療科では、地域の担い手としての一般的な診療から難治性疾患に対する専門性の高い治療まで幅広く行われており、遠方から診察・治療を受けに来る患者さんも少なくない。まさに大学病院並みといえる。

そして、その整形外科には、脊椎脊髄、骨軟部腫瘍、骨関節、足、スポーツ医学・膝関節、上肢外傷の領域を担当する専門医がおり、その数は 20 名を数える。

今回、取材にご協力いただいたのは近年話題になった Mist (首の最小侵襲手術) の開拓者であり、整形外科部長兼せほね骨腫瘍センター長、佐々木寛二先生だ。その活躍は国内にとどまらず米国を含めた海外にもひろがる。また、国内外の企業も講演やアドバイザーなどの依頼がひっきりなしに舞い込む。新しい手術方法の解説を含めたデバイス開発もそのひとつだ。

多忙を極める佐々木寛二先生にお話を伺った。

専門医をとるころには 小侵襲手術をマスター さあ型をみにつけましょう



現在、私は聖隷浜松病院で整形外科部長兼せほね骨腫瘍センター長として働いていますが、先に海外での活動についてお話ししたいと思います。臨床以外の活動です。

そもそもはアメリカに負けるなという心意気ではじめた活動であり、国内外の企業と新しい医療機器を開発したり、海外の企業や医療関係者に手技などを教えたりしています。日本を離れている日数は年間70〜80日位でしようか。企業コンサルタントという肩書きになりますが、アメリカをはじめ海外数社、そして、ここ日本では2社からの依頼を受けています。

具体的な活動は、先程も申し上げたデバイス開発のほか、手技書や手技ビデオの作成、手術指導となります。さらに講演も行います。活動の中心となるのは、やはりアメリカですね。アメリカでの活動は日が限られているので、モニタリング、ランチ、ディナーミーティングと開発会議をおこないます。

体力と智力の両面で刺激的な活動ですが、これには大きな責任も伴います。中には十億、百億という規模のプロジェクトも動いており、自分の失敗がこれらの企業の失敗に直結しますから、手術と同じく真剣勝負で取り組んでいます。しかしデバイスや新しい手術法の開発は医師としてのやりがい、モチベーションに大きく貢献しています。

それでは手術についてお話ししたいと思います。

MISTY

最近、メディアでもクローズアップされることが多い、私の考案した頸椎の最小侵襲椎弓形成術(MIST)についてお話しします。これは、既存の術式2つをミックスしたものです。平林先生が開発された首の筋肉をできるだけ傷つけない平林法と白石先生が開発された皮膚切開が小さい白石法です。誕生のきっかけは、当院にきて2年ほど経ったころ、首における小侵襲手術が進化していないことに疑問を感じたのです。神経が高密度に密集した頸椎の治療は術野を大きく広げて行われることが一般的でした。また、それでもリスクが大きく、治療を断念する施設も多かったと思います。さらに大きく切開する場合、頭髪を剃ることも必



マイクロサージャリーにより密集する神経の中を手術する

要です。患者さんの精神的な負担

も小さくはありません。なんとか他の治療法がないものかと考えて、「国内で数多くの首の治療を行っているのは誰なのか?」ということまで遡り、それが滋賀県に勤務する脳神経外科の医師達だと判ったのです。そして話を聞きに行ったところ、すぐには応用できないと気づきました。そもそも使用している機器が脳神経外科とは大きく異なるため、私たちがすぐに使えるものはなかったのです。

ですが、ここから大きなヒントを得て、自分で調べてMISTに辿り着いたのです。ですから、2つの術式と脳神経外科医のヒントによりトリプルミックスかもしれません。

常に進化する

私は小侵襲手術を多く手がけています。小侵襲手術では、脊髄の手術でも切開する部分がとても小さく3〜4センチ程度です。当院ではこれをさらに小さくし2センチにまで縮小しています。広範囲に切開するよりも術後の治りも早く、感染症の危険性も小さくなるため、理にかなった術式ですが、同時に特殊な技術と術前の正確な検査が求められます。現在、当院の小侵襲手術の症例数は、頸椎、腰椎ともに日本で有数の症例数だと思っています。

2018年に台湾で開催された学会に行ってきました。そこで韓国の医師による膝や肩の関節鏡を用いた腰の手術法の講演に大きな興味を持ちました。後ほど聞いたのですが韓国では脊椎も関節も内視鏡による治療が日本よりも格段に盛んだそうです。はやっているとんでもないかもしれませんが、そして、本年1月にこの医師のもとに押しかけ、手術を教えてもらいました。この手術法をBESSと言います。

従来までの小侵襲による脊椎の手術というのは、手術のためにできるだけ小さな穴を開け、そこにデバイスとカメラを入れるための筒を入れてから、それらを利用して治療するというものでした。しかし、BESSは関節鏡を使用し、直接カメラと道具を入れて治療します。この手術は脊椎内視鏡の概念を変えるものであり、当院でも取



背骨の模型を使った手術の説明はとてもわかりやすい

り入れて行っています。

2つしかない自分の手

最近、わかったことがあります。自分の手は2つしかないのです。2つのものしか持てないということです。限られた時間の中で、私がつかんだものは、患者さんと開業医の先生方との関係です。

患者さんは言うに及ばずですが、当院と私を信頼してご自身の患者さんを紹介してくださる開業医の先生方とのコミュニケーションには多くの時間を割いています。そのために、以前は頻繁に出席していた勤務医同士の勉強会、親睦会を諦めたこともあります。代わりになるべく診療所を訪問したりしています。普段でも患者さんに変化があれば、当日中に紹介元の先生方

に連絡をとりまします。これは当院の若い医師にも徹底してもらっています。このように話すところと仰々しいですが、実は当たり前のことだと感じています。

今後の仕事

現在、当科には年間50名を超える脊椎外科医が見学に訪れます。そして、そのほとんどが脊椎脊髄外科専門医です。北海道から沖縄、さらに香港や台湾からもいらつしやいます。この5年間では300名を超えました。整形外科だけの見学者数としては日本有数ではないでしょうか。

今後の僕の仕事のひとつは、次世代の医師をバッテリーボックスに立たせることだと考えています。国内外の流といわれる技術やトレンドをしっかりと把握してもらい、素地をつくってほしいのです。くわえて、私の技術も伝承できればと思っています。

いくつか具体例をあげると、脊椎の手術では必ず目にするノミですが、これを使用しない手術です。近年、低侵襲の手術では治療範囲がどんどん小さくなっており、大半が鏡視下手術です。そして、このノミはカメラとの相性がとても悪いのです。振動によるブレは医師でなくともわかると思います。これを改善するために手術用のハイスピードドリルを使用しています。歯科や脳神経外科では一般的です。

また、上級医が助手として入らなくても、はやく執刀医として手術ができ



背骨の手術には医師が5名体制の場合もある

る教育をしています。手術というのは助手として上手くても、執刀医として一流になれるわけではないからです。

手術にも型というものがありません。武術の型と同じく、まさに基礎と言われるもので、外科医が道場の流儀のように伝承していくものです。ですから型が成ったのなら、私になるべく部下の手術に加わりませぬ。私が入ることにより、私を意識した手術になるからです。執刀医の手術は執刀医のやり方に任せるといふことです。無論、技術と責任が伴うということをつけ加えておきます。そのために素地が必要なのです。その上で、是非ともブレイクスルーを成し遂げてほしいと思っています。協力をお願いします。当院には症例は山のようにあります。

若手医師へのメッセージ

医師になった人は、まず一人前の医師になることを目指します。実はここからが「医師」なのです。医学部入学や医師免許の取得ではありません。そして、そこに至れば次に「何を為すのか」と考えます。これこそが医師として一番楽しいことだと思います。

● 略歴

- 1975年 兵庫県生まれ 1996年 京都大学文学部を中退
- 1998年 香川大学医学部入学 2002年 同 卒業
- 2002年 香川医科大学医学部附属病院 整形外科 勤務
- 2005年 神戸労災病院 整形外科 勤務
- 2007年 新潟脊椎外科センター 整形外科 勤務
- 2012年 聖隷浜松病院 整形外科勤務
- 2013年 Washington University in St. Louis clinical fellow (9~11月) 留学
- 2013年 聖隷浜松病院 整形外科 勤務
- 2014年 聖隷浜松病院 せぼねセンター長



●取材を終えて

とにかく話題が豊富で楽しく魅力的な先生でした。「やるべきこと」「やりたいこと」が明確に見えている…。だから、自由奔放に見えるのだと感じさせられました。また、外科医がその手に握るメスへの恐れ、引き際についての想いもお話し戴きました。整形外科のみならず、外科を志望する若手には、ロジカルとリパティが共存する佐々木先生に是非あってほしいと思います。きっと力がわいてくるはずですよ。

そして、世界と日本を駆け回るスーパードクターの物語もまだまだ続きそうです。